



夢想論【宗教編】

私は高校時代からミッション系の学校に通っていましたので授業に、聖書論であったり、午前中には礼拝の時間などが合ってチャペルで賛美歌を聞いたり説教話を聞く機会がありました。まだ高校時代は古いゴシック調のチャペルで専門のパイプオルガン奏者の方がいたので、賛美歌の荘厳な演奏を聴いてあとの説教は聞かずに礼拝はふけたりしてましたが、聖書の科目の先生が素晴らしい方で、『聖書は優れた寓話であり、人生の意味を考える良い素材』として私たち生意気盛りの高校生に話してくれたので結構面白かった思い出があります。なにせ、生意気盛りの男子校ですからはなから全て否定して掛かるのは当たり前。それをいつも『そうだろうね!』と笑いながら奥深い話につなげる話法は大したものでした。

当時の私は完全な理学系人間でアインシュタインの相対論やカールセーガン博士のCOSMOS（科学や宇宙の話）に科学の透明性と超絶的な宇宙への虜になっていました。唯一好きだった文学はアルベール・カミュの不条理論を人間の善と悪が混在する本当の姿であると考え、リチャードバックのかもめのジョナサンを自由に生きることへのバイブルとしてボロボロになるまで繰り返し読んでいました。音楽はYMOとキングクリムゾンが好きと言う宗教と言うより邪教的な雰囲気の方がよほど好きだったので、他の同年代とは異邦人的な存在でした。ですから、そういったミッション系の世界に身をおいても宗教が私に何かを残すことはありませんでした。ただこの当時、『宇宙や自然（超絶的なもの）＝畏敬の念＝神格化＝偶像崇拜＝教祖』と言った構図が生じることは既に理解していたと思います。

高校の付属大学に理系が無かったもので、他の大学を受験し運良く引っかかって入学したのですが、大学もこれまたミッション系だったため、バブリーなチャペルなどがあり、1年目の必修科目でキリスト教概論なども受けました。授業の一環なので出ざるを得ない感じだったのですが、大学時代はそのキリスト教概論の教授の話．．．『聖書の話は実話である。人はキリストの自己犠牲の原罪を担って生きていくもの』．．．に納得がいかず、レポート提出だけで全員がほぼ通れる科目を教義への批判的なレポートのおかげで5年間も落とし続けました。冗談抜きでこのキリスト教概論の授業のおかげで大学は7年も通う羽目になってしまいました。

実は、3年目の時に『好い加減に留年もやばいので適当にレポート書いてこのバカ教授とおさらばするか』と思っていたときに試験会場に向かう駅のホームで女性の飛び込み自殺を目の前で目撃してしまったのです。向かいのホームに立っていたはずの女性が急行の通過時に居てはならない場所．．．線路の上に降り立ち、立ちすくんでいました。悲鳴のような警笛音を出しながら一瞬にして女性を巻き込んで行った急行電車。ぶつかって飛び跳ねると思ったその身体は、電車の下に瞬間的に巻き込まれて視界から消えました。その女性が巻き込まれた場所から100mほど通過してやっと急行は止まりました。その後に所々に散る『黒い油で汚れた肉座布団のようなぶよぶよの遺体の破片』を見たときに、神が人間を救うなどと言われてきたことが頭から吹っ飛び、またその教義に猛烈な反発を覚え、結局また超批判的なレポートを提出し、めでたく留年継続となりました。

『今の今まで生きていた人間の残骸』．．．。それは20歳程度の私には全ての倫理観が吹っ飛ぶほどの衝撃的な光景でした。

人間の思考も感情も、脳のシナプスとニューロン細胞の連結の中を走る電気信号によって生み出されるもの．．．。細胞が死に電気信号が走らなくなると言うことが、その固体の“死”を意味する。ただ、これだけの記憶や感情や思いが、肉体がなくなっただけで完全に消滅するとはとても思えない．．．。“魂”のような“特別な何か”が人間の存在意義としてあるはずだ。

魂のような存在を信じたい、何かがあって欲しい、と思いたいのは自分の存在よりもむしろ、家族など愛して死んでいった者達への願いであるのかもしれない。

ある意味、墓やミイラなどへの思いも同じものかも知れません。

ですから、その意味で私は人間には宗教は必要なものだと思うのです。

超絶的な出来事（愛する者の死）などに、気が狂いそうになり、心が耐えられなくなったときの自己防衛本能．．それが“信じる”と言う行為なのかも知れません。

また、そこに超人的な能力を持つ教祖などが居ると言われれば、人は救いを求めてしまっても仕方ないことだと思います。

私の知人にも居ましたが、愛するものが癌で余命幾ばくも無いと知らされたとき、この友人は『神でも悪魔でも良いから、魔法でこの愛する者を助けてくれ！』と願い、ある宗教団体に入信しました。本気で助けを求めたのです。この“人間の弱さ”は誰にでもあるものであり、感情ある人間が生きていく限り普遍的なものでもあります。“弱い”と言うことはなんら悪いものでもありません。私の中にも誰の中にもあるごく自然な感情の問題です。

ただ、その『信じる為の拠り所＝宗教』の“在り方”に問題があるのかもしれない。

紀元前の世界から全部足しても、戦争で死んだ人より、宗教紛争で死んだ．．．“異なる神の存在を許せない為”．．に死んだ人の数のほうがはるかに大きい。

カトリックはプロテスタントを殺せと言い、プロテスタントはカトリックを殺せと言う。イスラムはユダヤを殺せと言い、ユダヤはイスラムを殺せと言う．．．そして神の子らは銃を持つ。

1995年、淡路大震災が起こりオウム真理教がサリンをばら撒いたこの年。仲間を読んで一夜の花見を開催しました。その時の招待状に書いた詩を思い出しました。

“大地は揺らぎ、サリンの恐怖が忍び寄る夢の黄金郷JAPAN。

自ら神となるために狂気の終焉を演出する幻魔。

彼の地を約束するはずの巨大な箱舟も悲鳴を上げて暗黒の淵へと沈み始める．．．このどうしようもない世紀末。

一夜の夢を作りましょうか。

酒に酔い、花に酔い、音楽に酔う．．そんな嘘のように美しい時間を過ごしましょうか。

いつか思い出して夢見るような、そんな花見を演じてみましょうか。

この世界が夢か、私自身が夢なのか。

全ては幻でしかないこの生き様に、一石投じてみましようか。”

全ての人々の心が穏やかで、健やかなものでありますように．．．。

．．終夢．．